

【実践活動報告】

こどもの居場所づくりを通じた地域循環共生圏と地域共生社会の実践

Contribution to “Circulating and Ecological Economy” and “the Local Symbiosis Society” through development of the community for Children

中島 恵理 (同志社大学)
NAKAJIMA Eri (Doshisha University)

1. はじめに

長野県では、こどもの自己肯定感の向上をめざして「信州こどもカフェ」という呼称で、家庭や学校以外のこどもの居場所づくりを推進してきた。2015 年から 4 年間長野県副知事を務めた筆者は、子ども支援担当副知事として「信州こどもカフェ」の普及に積極的に関わってきた。

また、地域で SDGs を実現する概念として環境省は「地域循環共生圏」を、厚生労働省は「地域共生社会」を提唱し、筆者は、2019 年から環境省の管理職の立場で地域循環共生圏の推進にも関わってきた。

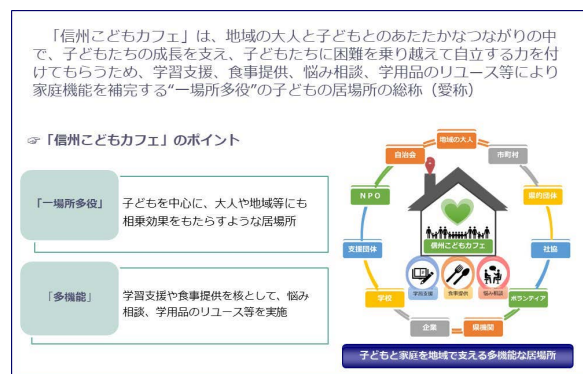
筆者は、長野県諏訪郡富士見町で 2 人のこどもを育てる一人の母親でもある。2011 年に富士見町の母親たちが「こどもの未来をかんがえる会（以下、「かんがえる会」という）」を立ち上げ、給食の放射能物質の測定を通じてこどもの食の安全を確保する活動を展開していた。筆者は、かんがえる会がこどもの居場所づくりを始めるタイミングの 2018 年から関わり、信州こどもカフェの実践を通じて地域循環共生圏や地域共生社会につながる取組に挑戦をしてきた。これは、筆者の行政官としての哲学、すなわち、「行政の立場で推進していることを、住民の立場で自ら関わることで、より良い地域の活動の展開と地域のニーズに即した政策の立案にもつなげていく」に基づく行動であった。

その後、行政の職を辞し、現在はかんがえる会の代表としてこどもが真ん中のまちづくりを実践している。ここでは、こどもを中心とした多世代の居場所づくりを通じた地域の SDGs の実現を目指す実践活動を報告する。

2. 信州こどもカフェとは

こどもの貧困が深刻化する中で、長野県では 2016 年 3 月に「長野県こどもの貧困対策推進計画」(URL1) を策定し、その中の一つの施策として「信州こどもカフェ」を掲げた。信州こ

どもカフェは、学校や家庭以外の地域の中での「一場所多役」のこどもの居場所である。「一場所多役」とは、「信州こどもカフェ」の特色を表現する概念であり、図 1 内で記されているとおり、子どもを中心に、大人や地域等にも相乗効果をもたらすような居場所を意味する。そのため、こどもたちが、地域の人たちと一緒に食事をしたり、勉強をしたり、悩みを相談することができ、またリユースの仕組により必要な教材や本などを入手することができる多機能な居場所を目指している。食やアートなど、こどもを支援する多様な技をもった人たちが集まり、こどもたちの多様な学びを支援する。これにより居場所に来るこどもの自己肯定感を高め、成長を支えることに加え、こどもを支援する大人にとって生きがいや交流の場となることも期待している。信州こどもカフェは、こども及びカフェに集う多世代の人たちに双方にとり多様な意義を持つ一場所多役を実現することを目指している。



このようなこどもの居場所が全国的に広がる中、2021 年に閣議決定した「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針」では、「全てのこどもが、安全で安心して過ごせる多くの居場所を持ちながら、様々な学びや、社会で生き抜く力を得るための糧となる多様な体験活動などに接することができ、自己肯定感や自己有

域課題の一つである。竹林が放置されることで、竹が住宅地に侵入したり、竹が倒れたり、竹林の土砂災害のリスクが高まるなどの可能性がある。

筆者が居住する富士見町においても、一部の地域で高齢化や生活スタイルの変化の中で竹林が放置されている場所がある。そこで、株式会社アトリエ DEF という工務店が環境事業チーム立ち上げ、放置竹林の整備をし、竹炭や竹チップとして有効活用をする「楽しく竹林プロジェクト」を長野県内で展開している。富士見町では、筆者がコーディネートして、2022年度に、合同会社つくえラボという地域づくり団体と連携して、富士見町の机地区の竹林整備を進めるとともに、竹林整備の担い手を育成するバンブーマイスターワークショップを講座形式で行っている。バンブーマイスターとは、竹林整備や竹の利用にあたって必要な知識や技術を身に着け、竹林整備の担い手として活躍する人のことである。アトリエ DEF によるバンブーマイスターの育成や竹林整備のイベント活動が、後述するような竹を媒介とした地域循環共生圏と地域共生社会の実現への手がかりが生まれることになった。

そもそも富士見町は長野県の中でも南東部の位置する高原の町である。また、八ヶ岳、南アルプス、富士山など日本有数の山々を望む風景の中で、農業や精密機械産業が営まれてきた。そのため富士見町では、冷涼な気候を生かした花やハーブの生産が盛んであるが行っている農業法人が複数あるが、例えばサムディという会社は、原種や原種に近い品種 100 種類程のハーブや宿根草等の苗を生産、販売している。これまで富士見高校養蜂部と連携して蜜源となるハーブガーデンづくり等積極的に地域活動にかかわっている。

新型コロナウイルス禍の中、富士見町でのネットワークが地域内での新たな活動が生まれた。前節で紹介したこどもの居場所ひこうせんでは、一般に販売されている除菌スプレーを使っていた。そこで、サムディ代表の板村浩之氏からラベンダーなどのハーブに一定の殺菌・除菌効果があることを伺った。板村氏自身がこども支援に協力的であったことから、板村氏をひこうせんの講師に招き、ハーブについて学ぶワークショップを開催し、ひこうせんに配置する除菌スプレーとして地元産のラベンダーウォーターをこどもたちと一緒に作る取組を行っていた。こどもの居場所ひこうせんでは、地域の関係者とながら、多様なこどもたちの体験や学びの場を提供することを目指して

いた。

このような中、2022 年 3 月に山梨県で開催された「やまなし環境教育ミーティング 2022」において、筆者がアトリエ DEF などが進める竹林整備について発表した。竹林整備を経済的な観点から進めていくためには、多様な竹の利用策を編み出していくことが重要であるところ、ミーティングの参加者から簡単にできる竹利用の一つとして竹プランターが有効だという話を聞いた。そこで、これまで関わりのあった、アトリエ DEF、つくえラボ、サムディをつなげて、竹プランターワークショップを行い、こどもたちと一緒にハーブを育てるプロジェクトを着想した。

アトリエ DEF、つくえラボ、サムディのいずれも、「こどもたちのためなら」ということで積極的に協力をしてくれることとなり、2022 年 5 月 23 日にひこうせんの居場所活動の一環として竹プランター作り&ハーブの苗植えイベントを行った。

富士見町の机地域で行われたバンブーマイスター講座で伐採した竹を活用し、アトリエ DEF の指導、つくえラボのスタッフのサポートの下、こどもたちと一緒に竹を切った。参加したこどもたちの多くは低学年で、生まれて初めてのこぎりを使ったというこどももいた。こどもたちが熱心にのこぎりを使って竹を切り、トンカチとノミを使って苗を植える部分をくりぬいた。そのうえで竹炭チップと竹パウダーを混ぜた土を敷きつけ、サムディが提供してくれたハーブの苗を植え、竹プランターを作ることができた。こどもたちには作業をしながら、なぜ竹を使うのか、竹を使うことが地域の環境保全につながることを説明しながらワークショップを行った。



図 5 竹、子供を媒介とした地域循環共生圏と地域共生社会の実現 (筆者作成)

これは、地域のやっかいものとなっている地域資源である竹を存分に生かし、また富士見の自然環境を生かして栽培されたハーブの苗を活用し、小さな循環の輪を作る地域循環共生圏の実践である。「竹」「ハーブ」といった地域の資源がつなぎ手となって、「こども」を応援するという共通の目的のもと、アトリエ DEF、つくえラボ、サムディ及びかんがえる会とひこうせんに来るこどもたちの協働が実現した。これは、地域の環境保全を図りながら、幸せに暮らしていくことのできる地域共生社会と地域循環共生圏を同時に実現するソーシャル・イノベーションの実験といえる。

(3)食を通じた地域循環共生圏・地域共生社会づくり

①3 団体の連携体制の構築

かんがえる会では、これまで町の中心部の公民館や公園を活用して1か月に一度程度、食事を安価に提供するフードイベントを開催することで、こどもを中心とした多世代の居場所づくり活動を行っていた。一方、新型コロナウイルス感染症が広がる中、フードイベントの継続的な開催が難しい状況になっていた。

新型コロナウイルス感染症が2023年5月8日より感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律(平成10年法律第114号)に規定する「5類感染症」に位置づけられたことから、かんがえる会ではこのような食を通じたイベントを再開できないか検討を始めていた。

富士見町の更生保護女性会は、女性の立場から地域における犯罪の予防活動やこどもたちの健全育成のため、子育て支援活動を行なっている。かんがえる会のメンバーの一人が、富士見町更生保護女性会のメンバーであり、更生保護女性会の会長が新たな活動を模索していたことから、両会の連携可能性の情報交換を始めていた。その結果、安全安心な食をこどもたちに提供するイベントを協働で開催することとなった。こども向けの食について助言をもらうため、更生保護女性会の会長が、町の女性団体連絡協議会を通じてつきあいのあった富士見町栄養士会に連携を呼びかけ、かんがえる会・富士見町更生保護女性会・富士見町栄養士会の3団体で協働して「サマーこども&ユースフェス」(以下、「フェス」という)を開催することになった。フェスは、給食がなくなる夏休み前に親子で健康的な食事について考えてもらうイベントとして、町の中心部の公園「ゆめひろば富士見」で2023年7月22日に開催するこ

ととした。メニューは富士見町栄養士会推奨の高野豆腐を使ったタコライス及び地域の食材を使ったルバーブ寒天ゼリーを提供することとした。

②サマーこども&ユースフェス開催にあたっての協働体制の構築

多くのこどもたちにフェスに参加してもらえるよう、こども・中高生は無料とし、おとな300円以上の価格で食事を提供することとした。そのため、かんがえる会が活用している補助金の他、更生保護女性会からの寄付金で賄うとともに、地域の企業からの協力をあおぐこととした。タコライスで使うレタスは、レタス栽培を大規模に行っている「トップリバー」から、トマトとトマトケチャップについては、「カゴメ野菜生活ファーム」及びカゴメと提携して資源エネルギー循環型のトマトを生産している「ハケ岳みらい菜園」から寄付を受けることができることとなった。また、富士見町栄養士会のメンバーが作っているお米やかんがえる会がフードドライブで確保していたお米を活用することとした。寒天ゼリーについては、フェスを行うことを新聞のニュースで見た地域の方々からルバーブとブルーベリーの提供の申し出を受け、大半の材料を賄うことができた。

また、単に食事を提供するだけでなく、夏休みを健康、安全、楽しく過ごすためのワークショップの開催も可能な範囲で行うこととした。更生保護女性会の活動は、こどもたちを犯罪から守るという意味での「安全安心」が重要な視点であることから、茅野警察署に依頼をし、自分の身を守るための「護身術のワークショップ」をイベント内で開催することになった。また、かんがえる会のメンバーの知り合いを通じ、中学校の先生と高校生によるUVレジンワークショップを打診した。これまでメンバー内でUVレジンを作っているグループであったが、今回のフェスを契機に「Misora」という団体名をつけ、初めてこどもたちにUVレジンを教えるブースをフェスに出展することとした。

また、かんがえる会では、ひこうせんとは別の10代の居場所を立ち上げるべく富士見高校の学生との意見交換の場づくりを始めていた。その過程で、富士見高校の養蜂部の高校生と交流する機会があり、フェスのことを共有したところ、養蜂部からこどもたち向けのみつろうクリームワークショップの出店をしたいとの提案がなされた。また、UVレジンのMisoraの活動に関わっている女性が富士見高校の総合学習のサポートも行っていたことから、フェスの

情報が富士見高校3年の先生に伝わり、富士見高校3年の総合学習で結成された2つのグループがフェスに参加することとなった。ペットボトルのキャップを溶かしてアクセサリーにし、この技術を地域内に広げることを考えていたグループ、ルバンビーという富士見高校のゆるキャラを使って地域を活性化することを検討していたグループである。

さらに、フェス当日に公園にタープを設置するため、町内の観光リゾートである富士見高原リゾートに協力を仰いだ。富士見高原リゾートからはタープの貸与に加え、ユニバーサルツーリズム普及の一環として、JINRIKI やモバイルEX 等の山でも車いすを簡単に移動できる乗り物の体験会を開催したいとの提案をいただくことになった。

上記のような形で、「こども」のために安全・安心な「食」を提供したいとの3団体の想いが高校生や地域の企業の賛同を集め、結果としてひこうせんと9団体協働でのフェスの開催につながった。9団体の構成は、図6に示したように、地域共生社会を実現するネットワークとなった。

当日は、好天に恵まれ、180 名を超えるこどもから大人までの多様な参加者、約 40 名の高校生から大人の主催者側の参加があり約 200 のタコライスと寒天ゼリー及び多様な体験ができるワークショップを提供するイベントを成功裏に行うことができた。このフェスは、こども支援という目的であるが、このフェスを開催した大人や高校生にとっても、やりがいと多くの学びのある楽しい一場所多役のイベントにもなったこれは地域の「食」という資源がたなぎ手となって、「こどもを応援する」という共通の目的のもと、団体、企業、高校生が協働し、相乗効果を発揮しながら、幸せに暮らしていくことのできる地域共生社会と地域循環共生圏の同時実現につながるイベントであった。

このフェスの取組は、2024 年度は、さらに主催団体に、富士見町食生活改善推進協議会を加え、提供する食づくりに子供達の参画を得るなど活動を発展させていくこととなった。具体的には、「主催者側が作った食の提供では食育としては不十分で、子供が作るところから関わるべき」の声や「夏の開催は食中毒の可能性がある」といった意見も踏まえ、今後は秋の開催としつつ「イベントから継続的な仕組みづくりへ」の充実を図っていくこととした（中島 2024）。



図6「サマーこども&ユースフェス」と地域循環共生圏・地域共生社会
(筆者作成)

5. コレクティブインパクトとその実現方策

米国の John Kania 氏と Mark Kramer 氏が 2011 年にソーシャル・イノベーションを実現するために「コレクティブインパクト」の重要性を提唱している。コレクティブインパクトとはそれぞれに活動をする重要な関係者が、セクターを超えて、共通の目標の達成のため社会課題解決のために相乗効果をもたらす形で取り組むこと (Kania & Kramer 2021) である。

かんがえる会では、竹や食といった地域の資源を媒体に、「こども」を応援する共通の社会的な目的のもと、関係者がつながり、市民団体、高校、企業の枠を超えて、それぞれの強みや役割を生かしながら、プロジェクトを遂行した。それにより、長野県が「信州こどもカフェ」の展開において据えた「一場所多役」の場づくりが実現した。このことが富士見町においてコレクティブインパクトが生み出される機会となった。

またコレクティブインパクトを生み出すための「つなぎ」を実現したのは、複数の場や団体に関わるメンバーの働きとこれまでの各団体との信頼関係づくりが背景にある。例えば、筆者は、かんがえる会の代表でもあり、アトリエ DEF の顧問を務めていた経験や、長野県みらい基金の休眠預金事業のプログラムオフィサー、富士見まちづくりラボメンバーという複数の役割を担っている。このような複数の立場で活動することにより各団体のメンバーとの信頼関係を作り、かつ各団体の資源、強み、ニーズを把握することができる。例えば、アトリエ DEF、トップリバーやカゴメ野菜生活ファームとも、これまでの様々な活動の中でコミュニケーションを図っており、その中で企業としてそれぞれの活動の地域での理解を深め、子どもに対する教育の場を作ることに関心をもっていることを理解していたことから、今回の働

きかけに対し、快く引き受けてくれることができた。また、更生保護女性会とかんがえる会の両方に所属しているメンバーが両会をつなぎあわせ、また Misora と富士見高校の総合学習の双方の活動にかかわっていたメンバーが双方を今回のフェスに結び付けてくれている。

さらに、これらの関係者の協働を促したのは、「こども」を応援するという共通の目的である。この共通の目的が、老若男女をつなぎ、それぞれの交流を通じて楽しい場づくりを作り、「支

える側」「支えられる側」という関係を超えて、人と人、人と社会がつながり、生きがいや役割を持ち、助け合いながら暮らしていく包摂的なコミュニティづくりにつながったといえる。

このような協働関係を構築しながら、コレクティブインパクトを発揮する形で、地域資源を活用しながらこどもの明るい未来を構築する地域循環共生圏と地域共生社会を同時実現するソーシャル・イノベーションの社会実験を続けていきたい。

引用文献

（日本語文献）

岡野隆宏（2020）「地域循環共生圏の創造—日本発の脱炭素化・SDGs 構想」『共生科学』11、12-21。

中島恵理（2024）「地域共生社会と地域循環共生圏の同時実現に向けた発展プロセス：長野県富士見町の子供の居場所を事例に」『同志社政策科学研究』26(1)、17-34。

（外国語文献）

Kania, J. and Kramer, M. (2011) Collective Impact. *Stanford Social Innovation Review*, Winter, 36-41.

（URL）

URL1 長野県（2016）「長野県子どもの貧困対策推進計画」長野県ホームページ（2023年7月30日取得、https://www.pref.nagano.lg.jp/kodomo-katei/hinkon_keikaku.html）。

URL2 環境省（2020）「令和2年版 環境・循環型社会・生物多様性白書」環境省ホームページ

（2023年7月30日取得、

<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/r02/pdf.html>）。

URL3 環境省（2018）「第五次環境基本計画」環境省ホームページ（2023年7月30日取得、https://www.env.go.jp/policy/kihon_keikaku/plan/plan_5.html）。

URL4 厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部（2017）「「地域共生社会」の実現に向けて（当面の改革工程）」厚生労働省ホームページ（2023年7月30日取得、<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000150538.html>）。

URL5 厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部（2017）「「地域共生社会」の実現に向けて（当面の改革工程）」厚生労働省ホームページ（2023年7月30日取得、<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000150538.html>）。